

徒然草

武者小路實篤著

ONE HOUR LIBRARY

徒然草私感

一時間文庫

昭和二十九年八月二十七日 印刷
昭和二十九年八月三十一日 發行

定價 120圓
地方
賣價 130圓

著 者 武者小路 實篤

東京都新宿區矢來町71
發行者 佐 藤 亮 一

東京都新宿區矢來町71
發行者 株式會社 新 潮 社

電話東京 (34) 7111-8
振替東京 808番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 扶桑印刷株式會社

製本 憲尊堂製本所

Printed in Japan

徒然草私感

武者小路實篤著



新潮社版

序

徒然草私感は、雑誌「新潮」に連載したものに、あと三回分程つけ加えたもので、元より不完全なものだが、讀む人は、徒然草をまだ讀まない人と假定してかいた。之をよんで徒然草を讀む氣になつてもらへば、僕はこの本を書いたことは無意味ではなかつたと思ふ。僕の本を讀まないでも徒然草を讀む人には、この本は蛇足が多すぎる本で、僕は敢て讀むことをおすゝめする勇氣はないが、徒然草に何となくつつき憎い人には、この本はいくらか役に立つと思ふ。

僕は日本文學に就て無知なものだが、しかし徒然草は讀めば讀む程、何處にも無駄がなく、作者がかく理由がなくて書いた處が一つもないのに感心する。實際どの段も、書いておきたくつて書いたものの許りだ。僕は始めつから、徒然草全部について何か書かうとは思はなかつた。むしろ好きな處許りをぬいて、それに就て自分の考へをかきたく思つたのだが、ぬき書きしようと思へば思ふ程、何處にも捨て難いものがあるのに感心し、結局、澤山の段を紹介することになつた。全篇を通じて感じることは、徒然草の作者は、秀れた宗教家と言ふよりは、常識の發達した、わかりのいゝ、感じのするどい人で、ものゝ感じ方が正直で、書くものは實に素直で、ぶる所が

少しもないことだ。讀者を輕蔑してゐない。無駄な説教の所が少しもない。興味の持ち所が實に人間の、正直である。だから時がたつても、少しも色があせない。今日讀んでも同感出来ることが多く、淺薄な所がない。坊主だから、佛教的な處があり、人生の見方も佛教的であることは、まちがひないが、凡そ坊主臭くない處が多い。

人間味の豊かさが、今讀んでも、興味を覺える一番の理由と思ふ。

又捕はれてゐる處がなく、自分の感じを正直にかいてゐる。

自分を偉く見せたいと言ふやうな、幼稚さは少しもない。又キザな處がない。

萬代不易の眞理をといてゐる本ではないが、萬代不易に愛讀されていゝ本とは言へると思ふ。作者兼好に就て、又兼好の生きてゐた時代に就て知ることゝ面白いことと思ふが、本文を讀むには知らないでもわかると思ふので、それは他の人にゆづり、あとは本文を見てもらふことにしたいと思ふ。

昭和二十九年七月

武者小路實篤

徒
然
草
私
感

徒然草をざつと一通り讀んだ、ずつと前に處々讀み、中々いゝことを言つてゐると思つたことがあつた。わけ知りの男と言ふ言葉が何となく頭に浮んでくる。たしかに賢い男だと言ふことがわかる。しかし論語など讀んで感心するやうな感心し方は出来ない。論語は讀めば讀む程、孔子に感心する。實に本當のことを語る。本當のことがわかつてゐる人だと思ふ。徒然草の作者は、氣持のいゝ考へ方をしてゐるし、中々ものゝわかる人だが、眞理を求めてゐる人ではない、何處までも普通人の立場に立つて、いろいろのものを見てゐる。その見方は正直で、その感じ方は微妙で美しい處があるが、當時の平凡な僧侶の常識だと思はれる處を、多分に持つてゐる。しかし文學者として見る時、さすがに優れた處があり、感じ方、考へ方に偏狹な處がなく、強引な處が

なく、素直で、こまかい處がわかり、興味の持ち所も、人間味に豊かである。

日本の古典としてたしかに尊重すべき作品である。隨筆集としては、最も愛讀されていくものではないかと思ふ。日本人は一度は讀むべき本の一つと思ふ。

しかし僕がこゝに徒然草を持ち出して來たのは、徒然草の價值を讀者に知らせる爲ではない、徒然草が如何に文學書として優れるものかと言ふことの紹介は他の人に任せる、又この本の研究は他の人に任せる。

僕がかきたいのは徒然草に書かれてゐる文章の内で、僕が特に愛讀してゐる處を讀者に紹介し、その内容に就て僕の言ひたいことを言ふことである。

僕は自分の言ひたいことが、言ひたいのだ。徒然草から呼びさまされた、自分の人生に就て考へてゐることがかきたいのだ。時に徒然草の作者にとつては迷惑なことがあるかも知れない、時には見當ちがひもあるかも知れない、時には作者に靈あらば會心の笑をもらしてもらへるかも知れない。しかしそれ以上、餘計なことを知つた風して言ふ奴だと思はれる場合が多いと思ふ。

讀者の内には徒然草の作家になり變つて、僕の愚と、生意氣を笑はれる方もあるであらう。しかし僕は出来るだけ作者に好意と敬意を持つて、その上で自分の言ひたいことを出来るだけ素直に言ひたく思つてゐる。

しかし短文で餘韻のある名文をかく名人をとつかまへて、長々しく、拙文で自分の言ひたいことをなるべく徹底して言はうと思ふ僕はたしかに、野暮な人間である。自分は何と思はれてもいい、生きてゐる内に少しでも自分の言ひたいことを言つておきたいと思ふのである。

参考に、佐成謙太郎著、明治書院出版の對譯徒然草新解をつかつた。僕は文學者としては物知らずすぎる。しかし言ひたいことは内に持つてゐるつもりだ。あとはかいてゐる内に、言ひたい處で、言ひたいことは言ふつもりだ。

二

徒然草の一番始めの言葉は有名である。

「つれづれなるまゝに、日ぐらしすゞりにむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」

作者は兼好法師ときめていゝのだと思ふが、この書き出しで、この本の性質をよくあらはしてゐる。實にずばりと言ひたいことを言つてゐる。しかも「あやしうこそものぐるほしけれ」と言つてゐる。内からあふれるものが感じられる。かきたいものが、今や頭にうづまいてゐる感じた。

全巻だれた處がない、今時の人のやうに、注文されたり、締切日におひかけられたり、金とりにならずに書いたりする氣持は、この作者は知らないのである。

純粹にたゞ書きたいことをかけばいいのだ。羨ましく思へば思へる境遇だが、さう言ふ境地で、誰に見せるともなく、かいてゆくのだ。この作者は無駄を少しもかく必要がなく、書きたいもの許りかいてゐるのだ。内容が充實してゐる。調子は何處もだれて居ないのだ。

その點實に感心していいと思ふ。だが今の僕にはさう興味の持てない處も勿論少くないが、しかし當時のことを知るには、さう言ふ處も、價值があり、作者の人となりを知るには反つて適當してゐるとも言へるから、今の時代の人にとつて、さう言ふ處も無駄ではないのだ。僕は順々に感想をのべたいとは思はないが、先づ二三始めの方から、例を出して、それから、自分の勝手に引用したい處を引用しようと思ふ。

「法師ばかりうらやましからぬものはあらず、『人には木のはしのやうに思はるゝよ』と清少納言がかけるも、げにさることぞかし」

坊主の身でありながら、坊主の惡口をかき、しかも枕草紙の清少納言の言葉を出して、徒然草をかく氣になつた、先輩に對し、さりげなく挨拶をしてゐる。その挨拶の仕方も心憎い處があると言へる。

第二段に、

「いにしへのひじりの御代の政をもわすれ、民の愁へ、國のそこなはるゝをもしらず、よろづにきよらをつくしていみじと思ひ、所せきしましたる人こそ、うたて、おもふところなく見ゆれ。『衣冠より馬車にいたるまで、有るにしたがひて用ゐよ、美麗をもとむる事なかれ』とぞ、九條殿の遺誡にも侍る、順徳院の禁中の事どもかゝせ給へるにも、『おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす』とこそ侍れ」

その時の贅澤について憤慨してゐるが、かき方がいかにもゆとりがある。しかし誰も反對出来ない方法で、より所を示してゐる。

いつの時代にも通用する言葉でかゝれてゐる。作者の人柄もわかるわけである。

第三段の、

「萬よろづにいみじくとも、色このまざらむ男は、いとさうくしく、玉さかづきの卮そこの當なきこゝちぞすべき。

露霜にしほたれて、所さだめずまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるは獨寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。

さりとしてひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからずおもはれむこそ、あらまほしか

るべきわざなれ」

之は有名な處らしい。僧侶の身でありながら、こんなことを言ふのは、時代のせりもあるかも知れないが、相當さばけた人にはちがひない。しかし今の世に生れて、今の街頭風景を見たら、この作者は何と言ふか。

色氣のあまり露骨なのは、興ざめに思ふであらう。色好む人はいとさうぐしく、玉の杯アスファルトの上にとり落すが如し、とは少し下手すぎる表現だが、何かうまいことを言つて、僕達を痛快がらしてくれるかと思ふ。それとも、手がつけれないので、黙つてゐるかも知れない。少くも興ゆかしいことが好きな作者は當時の方が、まだ住みよかつたかと思はれる。

三

第四段は

「後の世の事心にわすれず、佛の道うとからぬ、こゝろにくし」

色このまざらむ男の悪口を言つたあと、すぐ、この文句を書かないでゐられない處は、さすがに出家した人だと思はれる。僕は後の世のことは別に考へない。生きてゐる間にすること

をするのが、人間の務めで、それさへすれば、あとは永遠の安眠もわるいものとは思はない。涅槃こそ望ましきものと思はれる。しかし當時の人が、後の世の事を心にわすれぬ人を、たのしく思つたことはわかるやうに思はれる。東を思へば、西を思ひ、南を思へば、北を思ふ。兼好法師はさう言ふ人だつたらしく、其處がまた我等に好かれる處と思ふ、一方面的なではなかつた。

第五段には

「不幸にうれへに沈める人の頭おろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明かし暮らしたる、さる方にあらまほし、顯基中納言のいひけむ、配所の月罪なくて見むことさもおぼえぬべし」

この理想をある所まで實行したのは、良寛だと思ふ。今の時代にはこの境地に安住するのはどうかと思ふが、さう言ふ生活に憧れをまるで持たない人には、僕は好意が持てないと言つても、言ひすぎとは思はない。

金冬心の書に、

「鮮食、寡欲地を掃いて、香を焚く」

と言ふのがあるが、この境地に自分は入り切れないが、憧憬はすると思つた。今時の人にはかう言ふ境地は、あまりに縁がなさすぎる。今の人は魂の事を忘れすぎてゐるやうだ。だが、引こ

んで許りゐるのもどうかと思ふ。兼好も引こみ切りの男ではなかつたから、こんなことをかいたのかも知れない。本當に實行してゐたら、こんな生活に憧れて許りは居なかつたらう。だが我等の心は一方靜寂を求めてゐるのは事實で、それを求めなすぎるものは奥床しくは思へない。しかし奥床しいなぞと言ふことは今の時代ではもう過去すぎると思ふ人があるかと思ふが、僕はさうは思はない。罪なくて配所の生活に憧れる氣持もわからなくはないが、それで満足出來るとも思はない。だが寂しさに憧れる氣持は、人間の心の何處かにはあると思ふ。

それが皆無の人を想像すると、何となく怖ろしい。

四

第六段は僕の考へとは随分ちがふ。

「わが身のやんごとなからむにも、まして數ならざらむにも、子といふものなくてありなむ」

之は出家した作者にとつては當然な考へ方か知らないが、僕は人間にとつてよき子をつくることは大きな仕事のひとつと思ふ。子供の可愛さも事實であるが、人類が進化するにはよき子が生れることが大事で、子供が出来る喜びは自然だと思ふ。貴賤を問はず、子供は可愛いものだ。今日

まで我等が生きて來たことがよければ、今後人類はもつともつと生きぬくことがいゝことに思はれる。

殊にその後にかうかゝれてゐるのは、佛教的な考へ方かと思ふが、僕にはあまりいゝ氣がしない。

「前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、みなぞう絶えむ事をねがひ給へり、染殿大臣も、『子孫おはせぬぞよく侍る、末のおくれ給へるはわろき事なり』とぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひける時も、『こゝをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなり』と侍りけるとかや」

聖德太子のお子さんの運命など考へあはせて何か懐いものを感じる。子孫が劣るのは困るが、子孫は劣らないのが、大體として本當と僕には思はれる。

佛教元來の教へのことはよく知らないが、末世的な考へ方には僕は賛成出來ない。僕は現代をまだ野蠻時代と思ひ、之から本當の人間時代が來るのだと考へてゐる。地上から人殺しが絶滅する時、始めて人間時代がくるのだと思はれる。人命の尊嚴は段々人々によつて認められて來てゐることは事實に思はれる。

あまりに子供の多いのもどうかと思ふが、子はない方がいゝは少し消極的すぎるやうに僕には